



# 未来をつくる ソーシャルイノベーション 第2部

文・西村勇哉

暮らしの中から見つける変化の力

## CASE: 56 余暇—裏側にあるもう一つの価値—

1516年初版の『ユートピア』の挿絵。  
トマス・モアの『ユートピア』では、幅  
200マイル、周囲500マイルの島に54の  
町、6000戸の家庭が住み、市民は余  
暇の時間に学習に取り組むとされた。  
出典：Wikipedia



### POINT!

余暇の創出だけでなく、余暇の目的を検討すること  
で社会の可能性が大きく変わる。目的の精査が  
インパクトを生み出す。



イタリアの画家・ラファエロによる「アテナイの学堂」。ギリシャ哲学において余暇は、人格の完成のために必要なもので、なるべく余暇の時間を設けて哲学の思索に充てることが推奨された。出典：Wikimedia Commons

余暇の起源を労働の起源と考えると、狩猟採集の時代から農耕の時代に移った1万2000年前頃が余暇の概念が生まれた時期でしょうか。紀元前4世紀の古代ギリシャで、余暇の語源となる「スコレー」という言葉が生まれました。アリストテレスは、『形而上学』の冒頭で「数学的な諸技術がエジプトにおいて最初に成立した。なぜなら、そこでは神官階層は閑暇な生活を営むこと（スコラゼイン）を許容されたからである」と記し、学問の発達にスコレーが必要なものだと示しています。ギリシャ哲学の中で、スコレーは、人格の完成に必要なものであり、仕事はスコレーが確保できる程度に収めることがちよようによく、また享楽を避ける過ごし方がよいと考えられていました。その後、15世紀までの中世ヨーロッパ社会では、労働がより美化され、一般的な余暇の価値への注目は後退しました。トマス・モアの『ユートピア』ではそうした社会状況へのカウンターとして理想的な社会の姿が描かれ、「人々は勤勞の義務を有し、日頃は農業に勤しみ（労働時間は6時間）、空いた時間に芸術や科学研究を行う」と、適切な労働時間と余暇の過ごし方が示されています。



にしむら・ゆうや ● NPO法人ミラツク代表理事。  
大阪大学大学院にて人間科学の修士を取得。  
人材育成企業、財団法人日本生産性本部を経て、  
2008年より開始したダイアログBARの活動を前身に  
2011年にNPO法人ミラツクを設立。Emerging Future,  
we already have(すでに在る未来の可能性を実現する)  
をテーマに、全国横断型のセクターを超えたソールイ  
ノベーションプラットフォームの構築と未来潮流に基  
づいた新規事業創出のためのプロジェクト運営に  
取り組む。  
<http://emerging-future.org>

うしたなか、1847年にイギリスで10時間労働法が制定され、労働時間の短縮への取り組みが生まれます。近年の日本では、1947年に労働基準法が制定され、労働時間の短縮に取り組みまれ、戦時中の3500時間から大幅に減少した2400時間となり、2016年時点の日本人の平均総労働時間は年間1713時間です。一方で、経済学者のケインズが1930年に「孫の世代の経済」と題した小論文で、生産性が1パーセント複利で向上すれば労働時間は4分の1程度である週15時間程度になると計算したものの、労働時間の減少は下げ止まっています。『レジャー白書2018』で、日本人の余暇の過ごし方のトップ3は、「国内旅行」「外食」「娯楽としての読書」でした。余暇は、産業革命後の労働時間の減少とともに時間を増やしながらか、その目的はより娯楽へと移っています。余暇への積極的な注目を行うことは、社会を変える盲点を埋める取り組みになる可能性を秘めています。